

# 大地震末代噺種

土が大地へん

くくく炭焼と

以て吾後と

まま山平の

村く山成て

屋入おま

おれおれ

おれおれ人書

おれおれ入て死

失せろろその

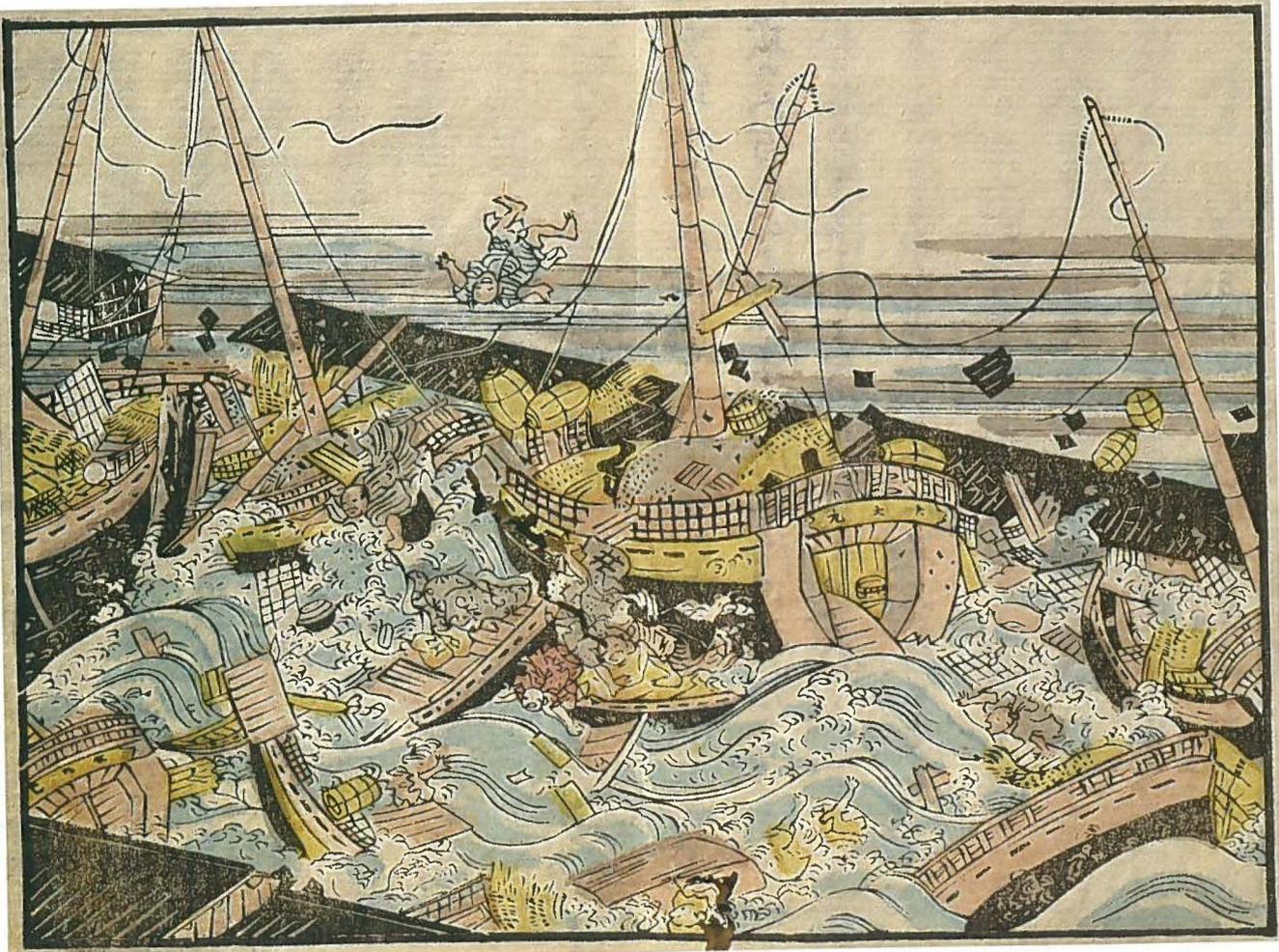
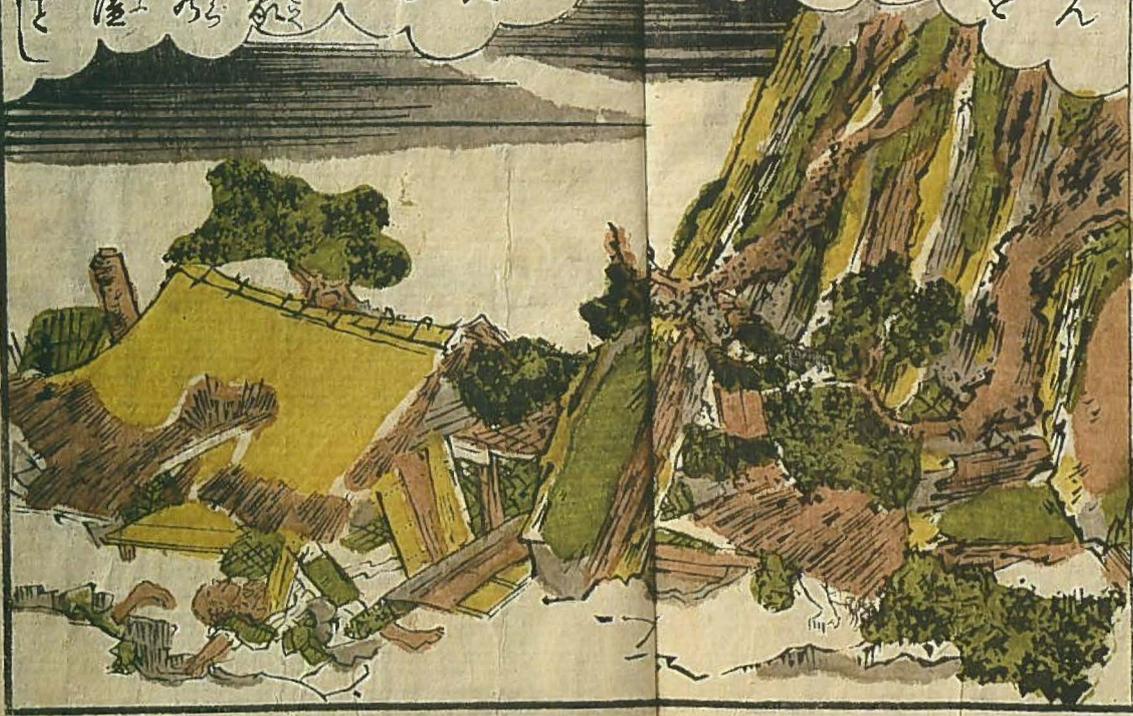
救と知らば

○ままおれおれ

共く入流お

おれおれ流ま屋

おれおれ大川のお



大地震末代噺種 (大阪市立中央図書館 所蔵)

これら2点の一枚刷り(瓦版)は、江戸時代末期の嘉永七年十一月五日(太陽暦では1854年12月24日)の申中刻(午後4時前後)に発生した安政南海地震での被害状況を描いたものである。一枚刷りは、紙一枚の状態で見られるほか、縮小複製されて折本に装丁し直された状態で現存する場合もあり、これらは後者にあてはまる。

安政南海地震は、紀伊半島沖の南海トラフ沿いを震源として発生した海溝型の巨大地震である。地震による被害は、紀伊半島～四国～九州の太平洋沿岸や畿内において甚大であり、直後に発生した津波によって紀伊半島～四国～九州にかけての太平洋沿岸では特に大きな被害が生じた。震源近傍では地震と津波の被害の区別が難しく、双方を合わせた被害は全体で少なくとも死者約1,900人、大破・倒壊・流失・焼失した家屋・土蔵など合わせて約63,300軒であったとされる。

一方、安政南海地震の約32時間前の十一月四日(同12月23日)の辰中刻過ぎ(午前8時頃)には、遠州灘沖の南海トラフ沿いを震源として、同じく海溝型の巨大地震である安政東海地震が発生していた。この地震の被害は、南関東～東海道～伊勢湾～紀伊半島や畿内において甚だしく、直後に発生した津波によって房総半島～東海道～紀伊半島の太平洋沿岸は特に大きな被害を蒙っていた。地震と津波を合わせた被害は、全体で少なくとも死者約2,000～3,000人、倒壊・焼失家屋は約30,000軒であったとされる。なお、この連続して発生した安政東海地震と安政南海地震は、ともにマグニチュード(M)8.4と推定されている。

上段の一枚刷りには、安政南海地震によって土佐国(現、高知県)で生じた山崩れによる家屋の倒壊が描かれ、彩色が施されている。これには「大地震末代噺種」と表題があり、上部に詞書が書き添えられている。この詞書によると、土佐国では地震による山崩れで山中の村々が押し潰され、地面が裂けて家や土蔵をはじめ人や家畜がその割れ目へ落ちて死亡したとある。また、出雲国(現、島根県東部)でも、地震によって地面に裂け目ができて人や家が落ち込み、泥水が噴き出して大川のように流れたとある。一枚刷りは本来、事件や災害といった話題性の高い出来事について、簡潔な内容で迅速に伝達することを目的に発行されるものであり、事実の正確性はあまり重視されない。そ

のため、詞書にある上記の被害記述は、必ずしも被害の発生場所やその程度を正確には表現しておらず、安政南海地震で生じた被害の特徴的な部分を表しているに過ぎない。そこで、一枚刷りの詞書は注意して用いる必要がある。

下段の一枚刷りでは、津波によって押し上げられた複数の大船(帆柱のある船)が、大坂市中の道頓堀川を上流側(左側)へ向かって遡っていく様子が描かれ、彩色が施されている。この一枚刷りには表題や詞書は見られないが、他の一枚刷りや文献史料の記述内容から、大坂市中での津波による被害の様子を表していることが分かる。安政南海地震の発生から約2時間後には大坂沿岸にも津波が到達しており、津波は安治川や木津川の河口から大坂市中へと浸入した。この当時、安治川や木津川の河口は港になっており、諸国から入港した数多くの樽廻船・菱垣廻船や北前船といった大型廻船が碇泊していた。これらの大船が津波に押し上げられ、市中を縦横に廻る堀川を遡って内陸へ運ばれていった。津波の高さは安治川河口の天保山付近で1.6～1.9m、大坂市中の堀川内で0.9～1.2mあったとされており、この程度の津波だけでは市街地に被害が生じることはない。ところが、折悪しく市中の堀川内には、相次ぐ余震を恐れた多数の町人たちが、上荷船や茶船といった川船に家財道具を積み込んで避難していた。そこへ河口付近から堀川に沿って遡ってきた多数の大船が次々に衝突していき、堀川内の川船は打ち砕かれまたは沈没して、数多くの町人が堀川中へ投げ出されて溺死するに至った。この一枚刷りには、このような大坂市中での津波被害のうち、道頓堀川での様子が象徴的に描かれているのである。

このような安政南海地震の被害が描かれた一枚刷りからは、地震被害が建物の大破・倒壊だけではなく、山崩れや地盤液状化など様々な形態で人々の生活基盤を破壊した状況が分かる。また、津波被害は沿岸部に限定されたものではなく、津波が河川を遡って内陸部に浸入した場合や、津波によって船舶が河川を遡った場合には、思いも寄らぬ形で被害が生じることを視覚的に知ることができる。

西山 昭仁／(東京大学地震研究所地震火山情報センター 特任研究員)